山口芸術短期大学研究紀要 第57号 2025年 pp.32～42

表現する力を育む音楽あそびの一考察

～県内の高校生・教育者・保育者に向けて実施した講座から～

杉山綾子

A study on music play that fosters the ability to express ：From courses held for high school students, educators, and childcare workers in the prefecture

Sugiyama Ayako

１．研究目的と背景

山口学芸大学・山口芸術短期大学「教育・保育支援センター」では、地域に根ざす大学の社会的役割として、山口県内外の小学校・幼稚園の教諭、保育所等の保育士、及び地域の子育てに関わる方々の支援の場として活用していただくための講座・講演会をキャンパス内、或いは教育・保育現場に出向いて実施している。

本年度、筆者は同センター主催の第34回夏期講座にて音楽講座「子どもたちの好きな歌・身近な歌で即興表現を楽しもう！」、また同センターに、はあと保育園中央（山口市）より職員研修の依頼を受けて「器楽による音楽あそび」の講師を務めた。

また、令和５年に高大連携事業の協定が締結された野田学園高等学校Myサタデー・プログラムのワクワク子ども教育講座において「保育の音楽あそびを体感しよう」の授業を担当した。同校で推進されている自分の未来を創造する取り組みをさらに発展させるための土曜日プログラムである。未来創造コースの保育に興味関心がある生徒さんに、豊かな感性と創造性の育成を図る目的で音楽表現分野の保育講座を担当した。

筆者は本学において、音楽表現・実技系科目の授業「保育内容の理解と方法音楽Ⅰ・Ⅱ」、「保育ピアノⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」、「保育内容の理解と方法表現Ⅰ・Ⅱ」担当している。授業のテーマとして、音楽・表現分野における保育内容の基礎的な知識・技術の確実な修得と共に、保育現場を念頭に置き、様々な表現活動の展開や総合的な活動が行えることを目指している。表現活動を展開する過程においては、子どもたち、学生そして保育者自身の感性を育み・養うことができる。筆者は、音楽及び音楽を通した表現活動のあり方を研究テーマとしている。本稿では、2024年度実施の講座内容を整理し、今後の教育課程や授業の充実と効率化のための改善を目的として考察することとする[1)]。

２．講座①「子どもたちの好きな歌・身近な歌で即興演奏を楽しもう」

2024年８月20日に開催された夏期講座を取り上げる。この講座は山口学芸大学・山口芸術短期大学　教育・保育支援センターが主催する第34回夏期講座「子どもたちの未来を創ろう」の一環として開かれたものである。筆者は音楽講座「子どもたちの好きな歌・身近な歌で即興演奏を楽しもう～ドラムジカを通した総合的な表現活動～」を担当した。

対象は、小学校・幼稚園・保育所の教育者、保育者または、教育・保育に興味関心のある方と

いうことになっているが、当日の参加者は、幼稚園教諭・保育所保育士８名であった。大学の教室を使用して90分間で実施した。

子どもたちには生活やあそびの中で音楽に触れ、そこから自発的な活動が自然に展開されることが望ましいとのことから話し始めた。伊藤嘉子氏提唱の「ドラムジカ」について解説し、山口芸術短期大学保育学科１年次後期の授業でのドラムジカ活動から沸き出てきた様々な音楽表現も紹介しながら講座を進行した。普段違う教育・保育現場の先生方同士で実践していく中で、今一度、私たち大人自らが想像・創造することを楽しみ・おもいっきり即興で表現することを協同し、ミニドラムジカを創作して発表した。

講座は、ドラムジカについての解説から入った。伊藤嘉子氏の「ドラムジカ」[2)]は、好きな歌・身近な歌・うたいたい歌を数曲選曲し、「歌」と「歌」の間にナレーションやセリフを織り込んで物語を進めていく音楽劇である。先生やお友達と一緒に、想像力を膨らませ協調・協同しながら即興表現を楽しむ。ストーリーや配役・表現方法が決まったら、保育者は台本を作成し、進行のための指導がスムーズにいくように記録しておくと良いこと、また、視覚的により楽しめるような簡単な小道具を製作することで、よりお話の世界を表現する一助になることを紹介した。

ドラムジカについては、次のように、歌から決めていく方法Aが一般的であるが、物語から決めていく方法Bでも良いのでは、と筆者は考えていると話した。

方法Ａ

うたいたい歌をみんなで決める（１曲～５・６曲と活動時間や扱い方による）

→選曲した歌からどんなお話・物語にしようか、主人公・登場人物・動物はどうするか話し合う（曲題名や歌詞を材料にするとイメージし易い）

→曲の順番を決める

→曲と曲がつながるようにセリフやナレーションを考えてお話をつくる（文節・オノマトペ等の曲中にセリフ・ナレーションを入れてもＯＫ）

→歌詞・歌のメロディやリズム・お話しの内容から、やってみたいこと（表現）のアイデアを出し合う

→配役・担当の確認をしながら台本通りに表現（練習）してみる

方法Ｂ

どんなお話・物語にしたいかを最初に話し合う

→お話の内容が決まったら、場面ごとに歌う曲を決める

→以下、方法Ａと同様に作っていく

講座では、この形について簡単に示した後で、具体的な表現の例を、限られた時間の中で短縮しながら解説・実演した。

音楽（表現）を本当に楽しむためには、保育者がたくさんの音楽あそびを持っていることが重要である。具体的な音楽表現活動として、うたあそび・手あそび・リズムあそび・楽器あそび・身体表現あそび・劇あそび・音や音楽を聴くこと等が挙げられる。

講座では、音楽表現活動にはいろいろな種類があるということを示した。

○歌う活動の種→オノマトペ・移動ド唱法・輪唱・交互唱・応答唱・サイレントシンキング・オスティナート

○リズム・音あそびの種→ボディーパーカッション・拍打ち・オスティナート・オノマトペ・こ

とばあそび・交互奏・応答奏・打楽器・合奏・手作り楽器・民族楽器・音板楽器・メロディベル・鍵盤ハーモニカ
○身体表現の種→童謡・幼児歌曲・あそびうた・わらべうた・手話・ごっこあそび・模倣あそび・創作あそび・空間あそび・季節ごとの園行事・伝統文化

実際の身体表現活動として、『波とかいがら』（まど・みちお作詞　中田喜直作曲）を選ぶことになった。この曲をうたいながら思い思いの身体表現をしようと呼び掛け実践した。

次に２グループになり、物語風歌詞の歌数曲から１曲選曲して「ミニドラムジカ」を即興創作した。前奏・間奏・終止部、またはメロディのフレーズ・詩の段落にナレーションやセリフを入れてお話を完成させた。ナレーションや配役のセリフを言う人・歌をうたう人とうたわない人がその時に可能で、かつ効果的な表現方法を話し合って決めてもらった（ピアノ伴奏の他に、授業同様に効果音・リズム楽器・メロディ楽器や身体表現も可能な限り総合的な音楽表現活動として活用を推奨）。

その後、簡単な台本・リズム譜を作成し、表現した（ここまでを30分で実践）した。最後にミニ発表会を行い、活動のまとめとした。

なお、講座では、実践曲として以下についての資料を準備していた。グループごとに選曲し、即興で創作した。

○『ことりのうた』　○『線路はつづくよどこまでも』
○『ぞうさん』　○『もりのくまさん』
○『山のワルツ』　○『いぬのおまわりさん』
○『おばけなんてないさ』

当日の参加者にアンケートに記入していただいた。その中からいくつか抜粋する。

・ドラムジカは即興で作るものだと知り、子どもたちの発想がどんなものがでてくるか、とても興味が湧いた。リズムをとるだけでなく身体表現を加えることができるので、より楽しめると思った。
・ドラムジカという言葉を初めて耳にしたが、私が大好きなジャンルであった。子どもたちの発想や展開をサポートしながら、子どもたちと一緒に楽しんでいきたいと思う。
・ドラムジカは初めてで、未知で緊張したが、即興表現したことに間違いはないことや、楽しむ心で保育を作ることが大切だと学んだ。そのための様々なあそびの種を増やしていきたい。
・実際にドラムジカ体験し、楽しかった。
・ドラムジカという方法を初めて知ったが、いろいろな先生方と一緒に選曲し、動きまでを考えて楽しく活動できた。これからの保育でも実践していけると面白いなと思った。
・音楽って自由に表現して良いんだな、自由に表現することって楽しいんだなと思った。
・ドラムジカを初めて聞いた時は難しいイメージであった。しかし実践してみると、みんなでしたいことをアイデアにして出し合うことで、気づけばドラムジカが出来上がっていた。

多くの参加者にとって非常に有意義な体験になったようである。なお参加者の中にドラムジカを知っている者はいなかった。また、年齢・保育者としての経験値の幅はあったが、現役保育者の経験値・向上心・保育者としてのリーダーシップと協同力・コミュニケーション能力をもって、短時間であったにもかかわらず互いの園での日頃の保育活動の内容や情報交換をはかりながら、

ユーモアと創意工夫があふれるミニ音楽劇がみるみるうちに出来上がっていた。

筆者の授業では、うたとうたをナレーションやセリフで繋ぐオリジナルのドラムジカから更に音楽表現方法の幅を拡げており、部分的に簡易打楽器や音板楽器・ダンスや手話を組み入れることも推奨し（あくまでも即興的に）、総合的な表現活動を１年次のまとめとして実践していることを補足して講座を終了した。

３．講座②「保育の音楽あそびを体感しよう」

2024年10月５日に、山口市にある私立野田学園高等学校での講座を担当した。これは、高大連携事業として、野田学園高等学校がワクワク子ども教育講座という名称で実施いているプログラムである。講座名は「保育の音楽あそびを体感しよう」である。対象は高校１・２年生の７名であり、高校の音楽室にて90分（45分２コマ連続）で実施した。

コースの担当教員より、未来創造コースの保育に興味関心がある１年生とコース外の２年生の生徒たちは筆者の講座前に保育の先行学習として、この土曜日プログラム授業で野田学園幼稚園に見学に行っているとの旨を伺った。今回が実質初めての保育の音楽実技系の講座であることを考慮し、「乳幼児の歌」を題材に、保育現場で扱われている歌やあそびの効果を説明しながら、うたうことから広がる様々な歌あそびや表現あそびを紹介した。実践を通して生徒さん同士のコミュニケーションを誘発し、思い思いの創造や表現が表出できるような講座内容と進行に努めた。

１）わらべうた

まずはわらべうたについて説明をした。わらべうたは、音域が狭く子どもでも真似のし易い楽しいあそびとして現在まで伝わっている日本の伝承童謡・伝承あそびである。ことば・数・音楽・リズム・運動能力をあそびを通して一体となっており、それぞれの発達を促す。乳幼児にとって、人の声をきくことや、触れ合い（家族や兄弟姉妹・先生・友だち等）は心を通わすコミュニケーションの基本となる。また、ルールを守ること＝社会性や、触れ合いを通しての愛着形成や自主性＝自己肯定にも繋がっていく活動といえるため、発達段階に合わせたねらいとあそびができるわらべうたを選曲し実践をしていきたいと話した。本講座では以下の５曲を取り上げ、幼児向けのわらべうたを紹介しながら実践した。

○『げんこつやまのたぬきさん』→２人・身振り・じゃんけん
○『おてらのおしょうさん』→同上
○『こどもとこどもがけんかして』→指の名前・表情
○『あんたがたどこさ』→２人・手合わせ・ボール・サイレントシンギング
○『なべなべ』→２人・３人・みんなで・他者との同調・見立て・身体コントロール

わらべうたは伝承あそびである。母語＝日本語の抑揚やリズム、いわゆる話しことばの特徴がそのまま口承され伝承されており、広い地域で伝承されていく過程で地域性・方言・生活環境によって変化している。そのため、ことば・メロディ・あそび方が異なっていることも紹介し、生徒たちに問いながら実践を進めた。１人のあそびから２人、３人、そして全員で『なべなべ』を体験する際には、生徒たちは緊張感よりもコミュニケーションの幅に広がりが見られるようになり、どうしたら上手にひっくりかえれる？・もどることができるか？を考えることも自然に生まれ、一体感を感じている様子へと変化していた。活動の最後に、乳児のために、見せる・顔に触れる・くすぐる・揺れる・揺らす・手をとる・身体を動かす・真似る等の伝承わらべうたがあることを一部実演しながら紹介し、１時限目の授業を終了した。

２）童謡

２時限目は童謡の説明から行った。童謡とは、大正後期以降に西洋音楽を取り入れながら子ども用に作られた歌のことをいい、子どもの歌の総称で、外国の子どもの歌を訳したものもある。昭和59年日本童謡協会が７月１日を童謡の日として制定されたが、児童文学者の鈴木三重吉は「世間の小さな人たちのために、芸術として真価ある純麗な童話と童謡を創作する、最初の運動を起こしたい」と、詩人の北原白秋の協力を得て童謡運動を始め、大正７年に児童のための雑誌『赤い鳥』が刊行されたことを話した。また、明治維新後、旧制学校の音楽教育のために西洋音楽を取り入れて作られた歌のことを『唱歌』と言い、音楽の授業名＝科目名であったことについても触れた。

講座では特に『ぞうさん』を中心にして解説・実演を行った。この曲は、お母さんぞうと子ぞうになりきってうたうものであり、音読・顔の表情・豊かな感性と表現が特徴的な童謡である。

郷土の詩人まど・みちおさんは、投稿した童謡が北原白秋の目に止まったことをきっかけに生涯にわたって詩を作り続け、『ぞうさん』、『やぎさんゆうびん』、『ふしぎなポケット』、『一ねんせいになったら』を作詞した。講座ではこのことを最初に紹介した。どの童謡にも親しみを持っている様子であり、最初にぞうさんの詩を皆で音読する際は、詩の映像を想像してもらい、「お母さんぞうと子ぞうが会話しているように」の声がけに生徒同士で楽しそうに音読ができていた。生徒たちは感じたままの思いをことばに抑揚をつけて音読したことで表現表出の取っ掛かりとなり、次にメロディをつけた際も豊かにうたうことができていた。「貴方が自然に笑顔になり、顔の表情そのものが豊かになっていることは、内なる心から楽しいと感じ、詩と音楽のファンタジーの世界に自身が入り込んでいる証拠であること。それが何よりも素晴らしいこと」を伝え、授業で子どもたちと触れ合う機会がある時はそのように語りかけたり、絵本を読んであげたり、歌をうたってあげたいと話した。

その後「三拍子を体感する」（拍打ち・ボディーパーカッション・サイレントシンキング）活動を行った。その中で、うたいながら拍打ちすると自然に一拍目が強拍になることを体感してもらった。座ったまま強拍を手拍子・弱拍を膝打ちや、２人もしくは３人組で強拍を手拍子・弱拍を前と左右で手合わせをするボディーパーカッションあそびをした。サイレントシンキングあそびでは最初「さん」のみをうたわず手拍子、「よ」も増やしたところあそびの中でも集中力を要することを実感していた様子であった。少し速く弱拍を軽やかに手拍子して、「ぞうさんのワルツになるよ～」などと談笑しながら盛り上がった。また、乳児にはほっぺに触れる・手を握り振る・抱く・膝の上にのせ支えるなどしてゆっくりとした三拍子に合わせてあそぶことができることを紹介した。

ぞうになる（身体表現）も行った。ピアノ演奏に合わせて思い思いにぞうを表現しながら動いてもらったところ、長い鼻を左右交互に揺らしてゆっくりと歩く姿が一番多く見られた。「三拍子を感じて」、「お母さんぞうになるよ」、「お母さんと子ぞうがお散歩に行くよ」、「お友達にご挨拶するよ」と様々な身体表現が表出するような声がけをして実践した。高校生ということもあり、恥ずかしさや戸惑いを見せながらも、声がけには瞬時にどう表現しようかと生徒同士でコミュニケーションをとる姿があった。

２時限目の後半はドイツ民謡が原曲である童謡を教材として、創作活動を体験してもらうこととした。

「題名・詩・メロディからイメージしてお話しを創ってみよう」と声をかけ、イメージペイントに取り組んだ。講座では『こぎつね』を取り上げた。原曲のドイツ語では猟師が捕った獲物を狐が横取りする歌詞で、主人公が猟師である。しかし、勝承夫さんによる日本語の歌詞は、人間の女の子の姿をかわいい子狐で擬人化し、晩秋から冬にかけての山での様子を描写されているこ

とを話してから、『ぞうさん』と同様に音読し、歌唱するところからスタートした。パワーポイント・配布資料には日本語の美しさや、ことば自体が持つ表現の幅広さが伝わり易いように、楽譜と共に漢字とかなで３番までの歌詞を提示し、音読した。題名・詩・メロディはあくまでもイメージする材料であることを確認し、自身のファンタジーを優先してほしいこと、どのように創作しても間違いではないことを伝えた。しかしそこから全てを大きく変更し創作することは時間的な難しさがあるため、子ぎつねが主人公であること・登場人物や動物は追加してよいこと・題名をそのまま活用しお話のみを作る・創作したお話しの内容に合わせ題名も変えてみる等の具体的な指示をし、５分間で即興創作をしてもらった。２名の生徒が筆者のピアノ演奏に合わせて創作した話を披露してくれた。こちらの童謡『こぎつね』に関しても、生徒自身の成長過程において非常に親しみを持っている楽曲・歌詞であったこともあり、逆にイメージの固定観念化が想像以上に強く影響している？・一回の講座ではなかなか思いきって自身一人での自己表現にハードルが高い？と感じる内容に収まった。最後に筆者が『楽しみにしていたお買い物』（こぎつね姉妹が楽しみにしていた村へお買い物に行くため、おめかししながらワクワクした様子でのやり取りの場面）を弾き語りした。

講座のまとめとして、子どもたちと音楽を楽しむために「幼児の歌」１曲の楽曲から実践した様々な活動の種があることを知ってもらえたかどうかを話し、幼稚園・保育園等の保育現場ではその他にも楽器あそびやダンスを組み合わせていることも補足して終了した。

４．講座③「器楽による音楽あそび」

2024年10月25日には、はあと保育園中央において職員園内研修「器楽による音楽あそび」を担当した。山口市はあと保育園中央から山口学芸大学・山口芸術短期大学　教育・保育支援センターに依頼があり、筆者が出前講座に出向いた。参加職員は園長・保育士７名であり、はあと保育園中央２階ホールにて、18時（保育時間終了）から120分で行われた。研修では器楽を使った音楽あそびについて説明と実践を行った[3)]。

１）楽器あそびを導入し表現しようとする心の芽ばえを助ける

研修では、楽器あそびとは、様々な音の出る楽器を用いて、音色やリズムで自分の思いを表現する活動であることを確認した。器楽あそびを導入するねらいを以下のように掲げた。

〇様々な楽器に親しみ、音を出すことに興味関心をもつ
〇手作り楽器で愛着を育み、音を出すことを楽しむ
〇楽器を使って表現することを楽しむ
〇音楽に合わせて、正しい使い方で楽器を演奏して音色を楽しむ
〇豊かな感性を養い、表現を誘発する

器楽あそびを取り入れるときのポイントは、以下である。

〇できる限り、様々な音色に触れる
〇年齢に合った楽器の選択と活動の内容
〇楽器の正しい使い方（姿勢・持ち方・鳴らし方・準備と片づけ）
→保育者は楽器の定期的なメンテナンス・管理をする
〇導入する曲は保育でうたっていて、子どもたちが大好きでみんなに馴染みのある曲、また、楽器あそびのイメージがし易い曲

→楽器を鳴らすポイントがわかり易い擬音（オノマトペ）の歌詞がある曲
〇活動の内容により、保育者のピアノ・音源の活用を使い分ける
→保育者はコンダクターであり、適切な進行・声がけ・最良の伴奏者であることが望まれる
〇身近にある素材や季節を意識した物を使っての手作り楽器の活用
幼児の楽器（民族楽器を含む）
リズム楽器→カスタネット・鈴・タンブリン・トライアングル・ウッドブロック・シンバル・大太鼓・小太鼓・ティンパニー・手作り楽器・ボンゴ・コンガ・マラカス・ギロ・カバサ・クラベス
有音程楽器→木琴・鉄琴・鍵盤ハーモニカ・アコーディオン・ハーモニカ・電子オルガン・ピアノ

幼児楽器は多種多様な楽器が存在するが、保育現場・保育者は適切な発達を促し・育むために、乳児・幼児の豊かな表現活動はあそびを主体として導入・活動されなければならないことを具体的な活動例の紹介と実践の前に再確認した。

２）具体的な活動の紹介と実践

研修では以下の８つのあそびを紹介した。

①「どんな音？この楽器のお名前は？　３歳～」

園にある楽器がどのような音色を奏でるのか？どんな形をしているか？子どもたちに見せて、聴いてもらって楽器の名前と音色を覚えてもらうよう機会を作る活動である。カスタネット・鈴・タンブリン・トライアングル・ウッドブロック・ギロ・クラベス・マラカス等、特別な準備が不要で、扱いや持ち運びが容易な簡易打楽器を１日１～２つと活動は定期的に繰り返し行うことが望ましいことを示した。（視覚・聴覚・記憶）

②「楽器当てゲーム　３歳～」

机の上にひと通りの楽器を並べて置き、保育者が楽器を鳴らし子どもが楽器名を言う。さらに保育者が楽器の呼称名を言い子どもは手に取るあそびである。（視覚・聴覚・記憶）保育者は楽器を箱や衝立を利用し隠して楽器を鳴らし、音色のみで楽器名を呼称してもらう（聴覚・記憶）

③「目隠しゲーム　♪『かごめかごめ』　４歳～」

１人１つ好きな楽器を選び円になり、ジャンケンで鬼を決める。「かごめかごめ」「かごのなかのとりは」「いついつでやる」「よあけのばんに」「つるとかめがすべった」までうたい周りながら、２小節づつ（「」内）楽器で拍打ちかリズム打ち（オスティナート）をする。「うしろのしょうめんだーれ」は鳴らさず止まる。目隠しした鬼の子どもの真後ろで止まった子どもに楽器を鳴らしてもらう。鬼の子どもが応える。真後ろの子どもが楽器を見せて、みんなで楽器の名前を言う（聴覚・記憶・わらべうた）。

④「私は音楽家　♪『やまのおんがくか』　４歳～」

この遊びは以下のように展開する。

うた　「わたしゃ　おんがくか　やまの　こりす（ことり・たぬき等楽器の数の動物）」
　　「じょうずに　がっきを　ひいて・たたいて　みましょう」
楽器　「キュキュ　キュッキュッキュッ　キュキュ～」擬音語（オノマトペ）のリズム

うた　「このがっきはなに？」
回答　「　楽器名　」

以上①～④のあそびを紹介した。また補足説明として、子どもが楽器の音をしっかり区別して聞き分けができる状態であるクラスでは、複数の楽器を同時に鳴らしてどんな楽器があったか？・いくつ楽器があるか？や、各種あそびの回答時の工夫として同型リズムの反復（まねっこ）ができたら正解にする等、バージョンアップ・工夫して少しずつ難易度を上げてみたりすると、子ども同士のコミュニケーションやあそび更に盛り上がり楽しい活動になることを示した。保育者自身がワクワクした気持ちで楽しみながら、様々なあそび方を生み出してほしいと伝えた。

さらにその他の楽器あそびを紹介した。

⑤「トライアングルって？！魔法をつかってきれいな音を奏でよう！！　４歳～」

園に必ずある楽器トライアングルはそのルックスと音色で子供たちに大変人気がある楽器である。しかしながら保育者が指導する時にむつかしさを感じているであろう楽器でもある。アンサンブルや合奏の活動に取り入れる前に、適切な使い方や楽器の特性をあそびの中で知り、正しい奏法で楽器が奏でる美しい音が子どもたちの耳に届き、感性を育む導入となるような方法として活用してほしいと提示した。さらに、トライアングルについては、できれば十分な時間を確保して、保育者が円の中心・子どもたちは周りで椅子に座ってじっくり活動することが望ましい（触れる・奏でる・聴き合う・コミュニケーションから発見や認め合い）ことを示した上で、以下の事項について説明した。

→紐を外したトライアングルとビーターを渡し、楽器の形・英語で三角形のことをトライアングル、棒をビーターという名前であることを伝える
→右手にトライアングル、左手でビーターを持ち打つ
→金属の音を確認するも、きれいな音がしないこと・響かないことを問い、保育者が魔法（その１）の紐を付けて打つ
→紐を配り、取りつけ方・正しい持ち方を教えて、先ずは紐をつけ右手で持ったトライアングルを動かさないゲーム（何秒動かないか保育者は数える）
→どこを打つときれいな音が出るか考えて順番に一音づつだけ打つ（他者の打った場所の音色を楽しみながら聴き合う中で発見・コミュニケーションが生まれるので、外側・内側等は伝えない）
→保育者が「ビーターを持つ左手に魔法（その２）をかけるよ」・「こうして打つとてもきれいな音が出るんだよ」と、持つ手・手首は軟らかくし、バネのように、跳ね返るようにビーターで辺の真ん中打つことを話しながら、三辺の内側・外側を順番に打った音を聴いてもらう
→２・３人組で内側の底辺と外側の右辺に指定して打ち合い、一番きれいな音を見つける
→響きを獲得したら、何秒響くか？を同グループで順番にロングトーンあそびをする
→「すごい魔法をかけるからみててよ」と、魔法（その３）を実施して、ビーターを持っている左手でトライアングルの右辺に触れる・握ることで、響きを瞬時に止める方法を教えて実践
→キラキラキラ～の魔法（その４）トレモロ奏も実践

ここまでの活動を一つずつ・一人ずつ丁寧に行いたいと話した。その後の活動では正しい姿勢で・揺らさずに・きれいな音でまねっこあそびやオノマトペ・オスティナートで音楽に合わせて打つ活動を経て、アンサンブルへ展開していくと良い。また、大きな音・小さい音での表現あそびや、ビーターではなく違う素材のバチやマレット、様々な楽器（ウッドブロック・木琴・鉄琴

等）を使用し、保育者の独自のアイデアで活動を計画してみてはと話した。

⑥「タンブリンで運転手さん」♪『バスごっこ』２・３歳～」

これはタンブリンをハンドルに見立て両手で持ってクルクル左右に回しながら自由に歩く活動であり、自由にイメージで身体表現したり、思い思いのあそびを総合的に楽しむ活動である。以下のような展開となる。

→オノマトペ「ハイ」「ア」「ドン」を叩く（打つ）
→「ポケットに！」「ねーむった！」「ギュッギュッ　ギュッ！」はジングルを振り鳴らす（トレモロ奏）

⑦「先生のピアノといっしょに　♪『さんぽ』　３歳～」

ここでは４拍子の曲（マーチ）を選曲し、保育者のピアノ演奏に合わせて子どもたちは楽器を鳴らしながら行進する活動である。途中でピアノの演奏が止まったら、子どもは楽器を鳴らす手と行進の足を止める遊びである。ここでは、好きな簡易打楽器を選び、拍打ちや定型リズムパターン（オスティナート）を打つことが望ましい。音楽にのって拍子感・リズム感を育むことができ、耳も使うため集中力も養うことができる。あそびの展開としては、ピアノの演奏法を工夫（強弱・スピード・高低を変化させる）することで、子どもたちは楽器の鳴らしかたや歩くスピードに変化をつけ、即興的に表現を楽しむことができる。基本の４拍子を十分に楽しむことができたら、２・３・（６）拍子も是非とも体感してほしいと話した。

⑧「コップで音あそび　２・３歳～」

これは、身近にある陶器製のコップやグラスをスプーンで叩いて音を出すことや音色の違いを感じる遊びである。用意するのは、陶器製のコップ・グラス・安定する形状の器や小鉢等・ティースプーン・ペットボトルもしくは計量カップ・バケツ・防水シート・吸水タオルであり、陶器・硝子の扱い・破損・怪我に注意しながら活動することが重要である。以下について説明した。

→透明グラスを用意し、空の状態から水を増やしていき音の変化を楽しむ
４歳以上～
複数のグラスを並べ、それぞれ違う量の水を入れ、グラスを順番に叩いて音の違いを聴く
→音の高い・低いに分別し、水が多いと低くなることに気づく
→グラスや陶器の種類を増やし、水の量を調整しながら３音・５音の音階創りにチャレンジする（移動ド）
→３音・５音で知っているメロディやオリジナルフレーズ（即興）の演奏を楽しむ

講座では、モロゾフのプリンのグラスやリュミナルク社（仏）の強化ガラス製のグラスが安定性・安全性の点からも扱い易いこと、また高音は陶器の材質にもよるが小さな器が適当であるため、パティスリーのプリンやブリュレの器を持参し、実践してもらった。最低音（移動ド）をグラス満水にし、それを基準（基音）として、水を少しずつ注ぎスプーンで打ち音の変化を調整しながら音程を作るようにと助言した。現役保育者のチームワークで効率よく６音階までを作ることができていた。子どもたちが主体となり活動する際は、様々な想定外が起こることが確実であろうことから、保育者の事前準備が必須であると話した。５歳児クラスになると活動のまとめの幅も拡がりメロディと２・３音のオスティナート（ミドミド・レドレド・ファドファド等）での

通奏伴奏とでアンサンブルの楽しさを味わうこともできることを紹介し、活動を終えた。なお研修で提示した６音階の一例、および整音した後の実践曲は以下の通りである。

６音階の一例
Ａ音（ラ）　180～200ml（モロゾフプリングラス）
Ｂ音（シ）　140～150ml
Ｃ♯音（ド♯）　70ml
Ｄ音（レ）　ほぼ空
Ｅ音（ミ）　ハート型プリン容器（陶磁器）０ml
Ｆ♯音（ファ♯）　波縁円形ブリュレ容器（陶磁器）０ml

♪実践曲『ちょうちょう』『ぶんぶんぶん』『メリーさんのひつじ』『チューリップ』『きらきらぼし』『ゆき』

３）アンサンブル・合奏・発表会の手助けに

参加した保育士に尋ねると、日常の保育現場で器楽あそびに関しては、小活動としては折に触れて割合気軽に導入されているようであった。しかしながらアンサンブルや合奏に関しては、専門的な知識と技術を危惧するあまりごく一部の保育士以外は積極的に計画・実施できていないと話された。結果的に楽曲の選曲・楽器の選定・合奏楽譜の準備までが先ずは非常に大きな肝となる発表会では、音楽が得意な保育者の手に計画・指導・実施の全てが委ねられていることはどちらの保育現場も同様であろうと推察する。この研修の最後に、合奏ももっと気軽な表現活動であることを話した。また、活動実施の一助になればと幼児歌曲数曲の楽譜を用意して簡単なアレンジの方法・活用のアイデアを紹介した。以下の曲を提示し、アレンジ方法を簡単に解説した。

♪『ことりのうた』『ぞうさん』『きらきらぼし』『おばけなんてないさ』『かっこう』『こおろぎ』『虫のこえ』『ゆき』

合奏用の概存楽譜はそのまま活用するのは規制が多く、その通りに演奏することにがむしゃらになり易いため、定形の音型・リズム・構成楽器を参考程度に活用したい。普段の幼児歌曲の伴奏楽譜を使用し、特別な高度なことをせずシンプルなアレンジでそれらの組み合わせをもって編曲とし、何よりも楽しくかつ満足な合奏が体験できることを最重視するように助言した。幼児の合奏はメロディとオスティナートでの伴奏を基本と考える。以下の点について解説した。

○歌詞・メロディ・伴奏部内にある基本的な拍子リズムや基本のコード・和音構成音で、メロディ群（うた・音板・鍵盤楽器）→リズム楽器群（打楽器）→伴奏群（音板・鍵盤楽器）に分けて楽器の選定と組み合わせをしながら全体を構成する
○特徴的な前奏・間奏・後奏、歌詞のオノマトペやメロディのリズム・音型はそのまま活用する。
○メロディ以外はパートごとのリズムを決め繰り返す（オスティナート）とすると、容易に覚えて演奏自体を楽しめる
○楽器ごとのリズムパターン（オスティナート）と色分け（マーカー）をし、楽譜の上にそのまま線を引く、細田淳子氏の『細田式編曲法』の活用を学生たちに推奨している

研修会のまとめとして、参加者７名で♪『こいのぼり』を細田式編曲法で実践し、ピアノ伴奏

１名・うた全員での合奏を10分間で編曲・練習して発表した。経験が少なく音楽活動が苦手な男性保育士もベテラン保育士のリードで手順を確認しながら活動を楽しんでいる様子であった。最後に、本研修は「楽器あそび」がテーマであったが、音楽表現あそびの素はどのような活動も「歌」であることを確認した。したがって歌を扱う時、保育者は、詩を理解して大切にうたうこと・正しい音程でうたうこと・拍子と理想的なテンポでうたうこと・曲想を感じて表現豊かにうたうことを非常に大事にしてほしいと話し、それが全ての音楽表現活動に限らず「感性の育みの素」となると考えると伝え、研修を終えた。

研修会では参加者はメモを取りながら熱心に聞いていた。活動場面でも子どもたちと接しているかのように活発に参加し、一つひとつの活動について興味をもって取り組んでいるように見えた。また⑧「コップで音あそび」、まとめの♪『こいのぼり』については実際に楽器を演奏してみたが、参加者たちは非常に楽しみながら学んでいるようであった。

５．おわりに

令和６年度実施した３回の講座は対象者が現役保育者と生徒であったことで、筆者が担当している科目で扱う内容からも実践し、「現役保育者が修得したいと感じているか？」、「生徒が保育における表現活動を主体的に楽しんでいるか？」等の有効性度を測るよい機会となった。現在、山口芸術短期大学保育学科では、教育課程の大幅な見直しと授業計画の再考察をしているところである。筆者は膨大な幼児歌曲をできるだけ多く扱いながら、感じたことを表出し、豊かに表現するために効率的かつ効果的な学修法を計画・実践・改善のサイクルを繰り返しながら、研究を継続しており、今年度の講座から、保育現場から求められている内容や実践の現状についても情報を得ることができ、授業に反映すべき点もより具体的になった。現場での実践力として授業で修得したことが実際に結びついていくこと、それを更に掘り下げ展開ができることが重要で、たくさんの楽曲を扱わなくとも十分に豊かな感性の育みを援助できる保育をしなければならないことを再認識した。同じ楽曲を扱う際はいつも同じ活動を繰り返すのではなく、様々な活動を加えたり、組み合わせたりして、絶え間なく新しい興味関心から生まれる感動や喜び・楽しみ、興奮や意欲等の子どもの内なるものを誘発させ、表現する力を育むと考えるからである。

令和７年度以降の「保育内容の理解と方法・音楽Ⅰ」「保育内容の理解と方法・音楽Ⅱ」で扱う楽曲の選定に関して、１曲の幼児歌曲から様々な表現あそびを提示・実践することを授業の核として計画を立てることとした。また学生には定期的に活動や展開のアイデアを求めることとし、学生自身の主体的・自発的な表現する力の育成に努めていきたいと思う。

注および参考文献

１）なお本研究における音楽表現についての視座については以下の文献に依るところが大きい。柳澤邦子著『領域「表現」子どもと楽しむための音楽表現　のびのびと心と身体を育む』（フレーベル館、2014年）。また本研究の中で使用する楽譜等の資料については以下の文献を参照した。河北邦子・坂本久美子共著『幼稚園・保育所・家庭で　楽しくうたあそび123〔改訂版〕』（ミネルヴァ書房、2022年）本廣明美、加藤照恵共著『こどもと楽しく「弾き歌い」 幼稚園・保育園のうたピアノ伴奏曲集』（ドレミ楽譜出版社、2010年）。
２）伊藤嘉子著『子どもとつくる劇あそび「ドラムジカ」』音楽之友社、2000年。
３）ここでは以下の文献を参照した。細田淳子著『わくわく音遊びでかんたん発表会　手拍子ゲームから器楽合奏まで』鈴木出版、2006年。